

第3回学識者会議議事概要

論点	意見	対応
<p>広域地方計画策定の基本認識について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国土計画の考え方が 1990 年代にがらりと変わっている。基本的な生活、雇用の場をいかに確保するか、人をどう呼ぶかなどの基本認識をどこかで触れるべき。(伊藤委員)</li> <li>・社会経済情勢の変化に応じて制度仕組みが変わっている。地方の側も相応の覚悟をしているということどこかで触れるべき。(伊藤委員)</li> <li>・住民が住んでいる中山間地域が、当面の緊急課題に対してどうするかということも考えておくべき。(小川委員)</li> <li>・中国圏の将来像の中にもあえて厳しい側面を直視し、次に向けた、攻めのための守りという視点、具体的に守らざるを得ないという発想、表現もあり得る。(作野委員)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中国圏の将来像」を提示する前提として、「基本的考え方」において、左記のような基本認識を示す。</li> <li>・中山間地域問題の緊急性という基本認識を示す。</li> </ul>
<p>対応策のとりまとめについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体化するための方策を考えるための前提条件としてこれで良いのか。現在の対応策の内容は、第4次の中国地方開発促進計画と変わらないが、果たしてそれで良いのか。(伊藤委員)</li> <li>・あるべき姿だけでなく実現のために必要な政策、インフラも意識しながら展開する必要がある。ソフトハード含めたインフラを意識して項目を整理すると、具体的な方向が見えてくる。(田中委員)</li> <li>・情報については産業面も交流も、全体を通して議論すべき。(小見委員)</li> <li>・地方計画として統合化していく作業が重要なポイントになる。計画を作るためだけでなく、従来の階層型社会ではない社会、ネットワーク型の地方をつくるためにも統合することが必要。(作野委員)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対応策については、構成団体からの事業・計画・構想・アイデアを踏まえて体系化することをベースとし、新たな対応策についても、論点としてワーキング会議や学識者会議で議論して、記述のレベル・内容について合意形成をはかる。</li> <li>・「分野別施策の基本方向」において、極力ソフトハードを含めた具体的な対応策を記述するようにし、明確にできないものについては方向性を示すという整理をする。</li> </ul>
<p>将来像について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くて頻繁にアクセスがあるなど、東アジア全般に対して有利ではないが、有利なこともある。(藤井委員)</li> <li>・産業面や瀬戸内海における環境技術を活かした国際貢献は瀬戸内海の特徴である。(小見委員)</li> <li>・持続可能性を考える時代に来ているので、環境関係の産業化による人材育成など環境に対するシナリオを持ち始めることが必要。(藤山委員)</li> <li>・瀬戸内海をはじめ、中国圏はコンベンションとリゾートを組み合わせた新しい活用の仕方があるのではないかと。(小見委員)</li> <li>・中国圏は若者が魅力を感じるわくわく感が欠けており、成長の極の理論を産業経済だけでなく、都市とか文化で考えていく必要がある。(小見委員)</li> <li>・中つ国という東西の連携の良さ、もてなしというキーワードを軸に考えると、もっとやわらかい観点が出てくる。もてなし、コンシェルジュ、そういった形の安心・安全のもてなしの中国圏を考えていくことは重要な視点。(小見委員)</li> <li>・関西と九州にはさまれた条件で、若者に第二のふるさととじてもらえる長期的な展望が考えられるような交流地域をねらってはどうか。(藤井)</li> <li>・積み上げというのは良いが、周り(四国や九州)はどうか、ということをおある程度踏まえていかないと。(戸田委員)</li> <li>・中国地方が外からどう見られて、何で飯を食っていくのか、住んでいる人がどうするのか、というこ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東アジアへの近接性、東西の交流性の高さなどという地理的優位性を踏まえて、将来像を検討する。</li> <li>・若者が魅力を感じる地域づくり、環境技術を活かした国際貢献、瀬戸内海の新たな活用などの観点から、将来像を検討する。</li> <li>・さらに、外部からの視点や、生活者の視点等を踏まえて、将来像を検討する。</li> </ul>

	<p>とを考えると将来像につながる。(戸田委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「中国地方はこういう働き方、ライフスタイルがある」という打ち出しを、一般の人にもわかりやすく提示していく必要がある。(藤山委員)</li> </ul>	
広域地方計画の実現について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地方の行財政体制とリンクさせておくべき。消防救急、医療や保健、義務教育の分野で効率性と有効性を確保するため、都市を中心に、水平的な広域連合で補完する仕組みを考えていくべき。(伊藤委員)</li> <li>・何を優先すべきか、財源をどう確保するか、合意形成をどう図っていくかを広域地方計画の中で記述、記載して欲しい。(伊藤委員)</li> <li>・中国圏という新しいイメージを出してそれを推進するときに、誰が責任をとって誰が推進していくのかを明確にしておかないといけない。(小川委員)</li> <li>・市町村がこの計画の中でどういう位置づけになるか。(小川委員)</li> <li>・地域で対応するためには、この地域でどうするというポリシーと、ポリシーに対する合意(最初の時点での合意)がないといけない。(大場委員)</li> <li>・中国圏の実施レベルでの体制を持ち得るかが問題。競争しつつコンセンサスを作っていくことが必要。(田中委員)</li> <li>・市町村として地元はどのような地区にしようと思っっているかを出していかないといけない。(折登委員)</li> <li>・道州制を念頭に置きながら中国5県が肩を寄せ合いながら、知恵を絞っていかねばならない。(櫛本座長)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広域地方計画の実現性に関する様々な課題として、事業主体の明確化、対応策についてプライオリティをつけること、合意形成手法など、対応策において具体的に記述できるものは「分野別施策の基本方向」において記述する。</li> <li>・今後検討が必要なものについては、「計画の推進」において課題として整理する。</li> </ul>
人材育成や定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人材を確保して育成するだけでは不十分。人口が逃げていかないような仕組みや、育成してその人たちをとどめる工夫が必要。(大場委員)</li> <li>・若者が中国地方を魅力的に思っていない、流出している。これをどういう風にとどめるかを考える必要がある。地域の持続的自立的なために人材育成は重要な要素となる(道上委員)</li> <li>・鳥取や島根の若者が、地元でやりたい学部は無いかもしれないが、東京にいかなくても岡山や広島があれば、そちらに来て頂けるようになれば面白い。(櫛本座長)</li> <li>・「人」をどう捉えるか。新たな公が「公」にとどまらず人々の生活にどう関わるのか。人づくり、人育てについて、計画で扱うかどうかも含めた議論が必要。(作野委員)</li> <li>・地域に住み続ける人がいるかどうか最大のポイント。(小川委員)</li> <li>・人口は確かに減少していくが、今家庭内にとどまっている人はかなりいるので、活用すべき人材はまだ多い。(折登委員)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人材の育成・定着については、都市・中山間 w、産業 w において、各分野の対応策として検討するとともに、中国圏の「将来像」における位置づけも含めて検討する。</li> </ul>
「新たな公」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「新たな公」は企業、NPO だけでなく個人も担っていかねばならない側面がある。(折登委員)</li> <li>・「新しい公」を戦略的に扱うためには、安芸高田市の地域振興区の協議会や、北海道 伊達市の民間活用など、政策的な手立てが必要だ。民間の活用の中にも「新しい公」の形がある。(小見委員)</li> <li>・「新たな公」は耳障りはいいが、民間丸投げという気がしないわけでもない。(古川委員)</li> <li>・森林には新たな公の役割がある。(古川委員)</li> <li>・中山間地域で「新たな公」の担い手がいたときに、支援方策も考えておかないといけない。(小川委員)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな公の役割については、各ワーキング毎に検討した上で、各テーマを統合して「将来像」における位置づけも含めて検討する。</li> </ul>